

西川先生と南の軌跡 —第三世界論から共生主義まで—

勝俣 誠
明治学院大学名誉教授

はじめに

社会科学の問題設定は時代の要請から完全に独立してその存在意義を主張しにくいとしたら、私にとって西川潤先生は時代の変化をいつも機敏に嗅ぎ取って、多様な研究課題を多様なアプローチで生涯追求した経済学者であった。以下、1960年代末の西川先生との出会いからスペインで亡くなる2018年までの先生とのわたくしが直接かかわりあった限りでの研究交流の半世紀を、やや単純化を覚悟して、年代別に想起してみたい。

1. 1960年代 「第三世界論」時代

この時代の日本はレギュレーション学派がフォーディズムと類型化した国民経済成長で、日本国内が大衆消費時代を謳歌していた。その中で、西川先生はアジア・アフリカ・ラテンアメリカの国際政治経済での自立への動きに注目した。先生はヨーロッパの植民地支配を経験した「南」地域の分析、報告、紹介を日本で精力的にしている、当時、国際機関や行政用語としてもこの南北問題は定着しだした。学部卒の間もなく、ハノイ、ハバナ、あるいはアルジェに行って、新しい南の「革命」をなんとかして学びたかった私にも当時アルジェリアへの日本企業の駐在員のポストを紹介された。

折から、アジアではベトナム戦争がたけなわであった。欧米の大都市では若者や学生を中心としたベトナム戦争に反対する様々な抗議運動が高揚期を迎えていた。西川先生のベトナム反戦の立場はそのころ大学の校舎内で教員組合の仕事だといって、反戦チラシを掲示板に張っていたのを見かけたの覚えている。

西川先生による日本の論壇でも一足早い「南」の世界の注目は世界現代史の文脈では、1955年のアジア・アフリカ会議（通称バンドン会議）にさかのぼれるであろう。この非西欧リーダーの出会いは現代史においては植民地支配を受けた非西欧世界の中で、インド、中国、インドネシアなどが当時少数であったアフリカ独立国とともに、米ソの東西対立の狭間で、弱き「南」が自己主張して、より公正な国際経済秩序を求めるといふ壮大なプロジェクト構想の出発点画した。

西川先生のこの時代の鋭敏な嗅覚ともいえるべき「南」世界への着目は多くの著作を生むことになったが、彼のこの視座は、フランス留学時代にすでに形成されていたようである。最近、西川先生の知己であったある雑誌の編集者が1960年代の彼の留学時代に週刊「朝日ジャーナル」に寄稿した記事につい

ての国際派評論家の堀田善兵衛による賛辞文の一部のコピーを送ってくれた。『中野重治・堀田善兵衛往復書簡集 1953-1979』（影書房, 2018）で、「朝日ジャーナル（1966年1月2日, 筆者注）に二宮圭（西川先生のパリ留学時代のペンネーム, 筆者注）というパリ在住の人が「ベンバルカとチェ・ゲバラ」について大変良い文章を書いていました（同集, 69ページ）」と堀田氏は褒めている。

こうした「南」から「北」を再考するという視座の転換はやがて、南米とパリ発の従属理論にいち早く注目し、西川先生を日本の論壇に紹介・論評した先駆的存在として知らしめることになる。実際、日本の社会科学の従来 of 土壌では、例えば日本近現代経済史の手法は西洋近現代経済史との比較考察が中心で、また国際経済学も日米欧の経済力の分析や比較研究を主たる対象としていた。

2. 1970年代 資源ナショナリズムの時代

1970年代初頭の大手石油企業に対するアラブ産油国の自国資源に対する主権の主張は他の南の一次産品輸出国にも広がった。アラブ産油国及びイランの原油に大きく供給を依存していた日本は政財界に危機感を募らせることになったという当時の国際政治経済状況もこの従属理論に日本での一定の受容を促したと思われる。

とりわけ、1971年アルジェリアが同国内で操業するフランス系石油会社の資本を51%国有化した出来事で象徴される資源ナショナリズムの波は資源国「南」対 資源消費国の「北」という南北対立交渉という南北間の新たな経済秩序の幕開けを告げた。西川先生はこの新たな時代潮流を担う日本での中心的経済学者として「南」の声を精力的に代弁した。

西川先生の訳出したサミール・アミンの『不均等発展 周辺資本主義の社会構成体に関する試論』（東洋経済新報社, 1983年）は、以降ロングセラーとなった。私はパリ滞在中であったが、先生に第4章「低開発の発生と発展」及び第5章「低開発における周辺部の社会構成体」の下訳を依頼され、おおいに自分の勉強不足を知らされ、いわば西川先生によるゼミレポートの添削を受けたようなお手伝いであった。確かに、マルクス主義的経済学に立脚した従属理論は日本では半世紀を経た今日、存在感を失った感がある。そこで提示されていた「南」のナショナリスト諸国家観の連帯による社会主義的発展のシナリオは、グローバル資本主義のダイナミズムの織りなす国際分業ネットワークに参入して従属を逆に武器にして発展した新興工業国群の登場で説得力を失い、結局「低開発のさらなる進展現象」[Development of Under-development] は生じなかった。

しかしながら、植民地支配によって地域均衡を外部の強大な暴力的力で破壊された資本主義的発展を「周辺資本主義」と命名し、「北」主導の近代化の限界を明らかにしようとした知的営為とそこから生まれた分析概念（例えば異なる生産様式の暴力的接合）は今なお極度の貧困と暴力にさらされているサハラ以南のアフリカ地域のようなグローバル経済の底辺を構成する地域の分析と展望には大いに貢献していると思われる。

3. 1980年代-2000年代 開発と貧困対策時代—内発的発展への道

1980年代にはいると国際市場での原油価格は低迷しだし、「南」の途上国は軒並みと「北」の先進国に対する累積債務返済問題に直面する。債務繰り延べ条件として課せられた「構造調整」と呼ばれた市場原理の教条的实施は1970年代に高まった「南」の「北」との交渉力を弱め、南北関係は冬の時代に入る。

この時代わたくしは西アフリカやカナダの大学の研究・教員生活で先生にほとんど直接お目にかかる機会はなかった。先生はアジアの開発政策における「内発的発展」研究に力を入れていたようであった。

1980年代後半、フィリピンのマルコス長期政権の崩壊が始まっていた時期に、同国で貧困と搾取が絵に描いたように観察されるといわれたネグロス島の飢餓と貧困についての国際共同研究に誘われた。1980年代初頭、西アフリカのダカール大学勤務時代、半乾燥気候のサヘル地域で大干ばつによる飢餓問題を目の当たりに見る機会があった私は、モンスーン・アジアの飢餓問題の原因に大いに関心があった。この共同研究のおかげで見えてきたのは、サヘル農村部の貧困が脆弱な自然条件プラス農政の破綻に主因を見出すのに対して、ネグロス島のそれはサトウキビ農園主対そこで働く土地なし農場労働者という社会関係を主因としていた。国際砂糖価格の暴落で農園主が農園労働者を解雇した結果、主食のコメを市場で買えない世帯が飢えたのであった。これらの調査・分析報告は西川先生の編で『援助と自立：ネグロス島の経験からくポリティカル・エコノミー』、日本ネグロス・キャンペーン委員会、同文館、1991年、として刊行され、私もフィリピン・バコロド大学の研究者と共著で一章を担当した。この研究でネグロス島の「内発的発展」に立った「自立」とは周辺資本主義国たるフィリピンを規定する国際政治経済要因の分析と展望において論じられることを学んだ。

そして2000年代に入るや西川先生は国際開発学会の会長になられた。「開発」という20世紀後半を特徴付ける時代の熱病とも思えだしたコトバに距離を取り出した私は当初この学会にあまり関与しなかったが、先生に運営の一部を依頼され常任理事・会計委員長なる役職を担うことになった。結局、経理のプロたる私のゼミ卒業生のボランティア活動で何とか乗り切った。日本経済は低成長時代に入り、経済成長より「生活の質」が問われるようになった。

4. 共生主義宣言時代 2010年代以降

2010年7月、「より良い共生が可能な社会を目指して」と題する東京日仏会館での日仏シンポジウムがきっかけとなり、当時同館の学術委員であった私は日本側の参加者として西川先生にも入っていた。まさに既存の経済成長を再考し、「生活の質」をも求める新たな時代潮流に先生は積極的に関与した。フランス側は脱成長・反功利主義運動（MAUSS, mouvement anti-utilitaire dans les sciences sociales）系の経済学者、社会学者が中心であった。このシンポのまとめは勝俣・マルク・アンベール編著の「脱成長の道一分かち合の社会を創る」、コモンズ出版、2011年、にて西川ゼミの中野佳裕氏の翻訳およびコモンズ出版の大江正章氏の並々ならぬ協力のおかげで刊行された。西川先生の発表は第3部で「日本人の本当の幸せになるために一生活の豊かさの測り方」でまとめられた。おりしも2011年3月にはフクシマ大災害が生じ、フランス発の共生主義宣言の日本語版を西川先生はマルク・アンベール氏と出すことになった。『共生主義宣言 経済成長なき時代をどう生きるか』、コモンズ出版、2017年、で「モノよりもつながり, le lien plutôt que le bien」を基調とする本で、私は第5章「現代世界における「農の営み」の根拠」を寄稿した。この日本版の準備に当り、私は先生と2016年5月、福島県原発被災地域の現地調査と農民運動のリーダーの方とのインタビューを実施した。想えばこの東北旅行は先生との最後の旅であった。

むすびにかえて一人間の経済学を目指して

2018年10月、社会経済を考える国際シンポに参加すべく向かったバスクの街で亡くなった。時代とともに歩いて、考えて、また歩き続ける経済学者であった。その新たな知への意気込みのスタイルは私のそれと対照的であった。先生の修士論文のテーマはカルヴァンの経済思想だったと記憶するが、先生の知的営為は西欧近代資本主義の文化的説明としての禁欲的（ascetic）プロテスタント精神をしばしば私に想起させた。先生は、タバコはもとよりアルコールもワイン少々であり、お供した数々の現地調査でもその禁欲精神にしばしば圧倒された。対して、私は強くはないが、常時軽いアルコール飲料（かつていた学部の教授会が長引いたとき、缶ビールを同僚に配り、感謝されたこともあれば、また咎められたこともあった）と親しんで、かつ大の昼寝好きである。

ただ経済学に人間の次元を回復するという知的営為では、先生から多くを学んだし、今もしっかりと使命とヴィジョンは共有している。先生、ありがとうございました。

2019年12月22日 冬至